

令和7年度 第2回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日時：令和7年10月14日（火）18：00～19：40

場所：川崎市役所南庁舎5階 教育委員会室

出席者：卯月委員、岡田委員、高橋委員、中谷委員、米林委員、浦山委員、宮越委員、五十嵐委員、渡辺委員、百瀬委員、稲葉委員、石村委員

（事務局）落合教育長、田中教育次長、佐藤総務部長、岩上教育政策室長、北川学校教育部長、植村学校教育部担当課長、大島生涯学習部長、大野総合教育センター所長、豎月教育政策室担当課長 他

欠席者：倉持委員

傍聴者：なし

進行：岩上教育政策室長

司会：豎月教育政策室担当課長

〔配布資料〕

資料1 川崎市教育改革推進会議運営要綱

資料2 川崎市教育改革推進会議委員名簿

資料3 次期かわさき教育プランのキーププロジェクトについて

資料4 次期かわさき教育プランの施策・事務事業について

資料5 意見交換のテーマ

参考資料座席表

（18時00分 開会）

（次期かわさき教育プランのキーププロジェクトについてグループ協議の発表）

【Aグループ 教職員が働きやすい環境づくり】

石村委員：Aグループです。よろしくお願いいたします。我々は働き方について、グループ協議をさせていただきました。

最初に、浦山委員から、資料3の23ページにも書いてありますが、南河原小学校・中学校でA Iを使った取組について紹介がありました。生成A Iがどうなっているのかという話や、教育次長からも「学校でも活用を進めています」というお話をいただき、これからそういったことをしながら、学校現場や教職員の働き方改革にどう生かせるかという話をまず行いました。

その後、高橋委員から、愛知県の取組の話や、成果を出しているところ、まだ課題として改善できていない点などを教えていただきました。例えば日本では、教育課程の部分をなかなかコンピュータで管理できていないという話がありました。イギリスでは、教員が休むときに、A Iなどのシステムで授業プランや時間割を自動的に作成して、管理職の方が対応しているといった例もあるそうで、やはりかなり違いがあるなど感じました。とても学びの多いお話でした。

こうしたことは今後、川崎市でもぜひ進められるといいなと思いながら聞かせていただきました。

私のほうからは、教職員の業務軽減について、組合からの意見を紹介しました。ワックスがけやカーテンの設置作業、旅費システムの利用などについて、負担感があるという声が根強くあります。特に旅費システムは15時から18時ごろに各校で一斉に接続することが多く、その分時間のロスが生じているという点を挙げました。

今日のテーマでもある「見える化」というところで、教職員がどのように働いていて、どうすれば有効に時間を使い、生産性を上げていけるのか——。そういった部分をしっかり見ていきながら、12年間に向けたK e y P r o j e c tに組み込んでいってほしいという話をさせていただきました。

以上でございます。

司会：ありがとうございました。

Bグループ、よろしくお願いします。

【Bグループ 探究的な学びの充実】

五十嵐委員：Bグループ、探求チームの宮前小学校の五十嵐です。

本校の、話をここでたくさんさせていただいたんですけれども、総合的な学習は3年生からスタートします。ちょうど今、3年生が先日「かわさき阿波おどり」に参加させていただきました。3年生もどういうふうに総合を進めていけばいいかと悩んでいたのも、10月に「かわさき阿波おどり」をやりました。

その前の7月には、銀柳街で七夕飾りをやってくださいと毎年お願いされています。これからいいなかわさきフェスティバルというものがこの辺で開かれるかもしれません。川崎小の子どもたちが直接出るわけではないのですが、いろんなグループや団体で参加している子もいます。稲毛神社では8月にお祭りがあり、そこにも当然参加している子がいます。

社会科では、学習のスタートとして街探検を行い、2年生も少しやっているのですが、今度は人やまちを社会科的な視点で見て、「どんなまちなんだろう」と考えます。それをどうつなげていくかが大事ということで、3年生については、そうした取組をかわさき阿波おどりや七夕などと結びつけて進めていけるかなと話しました。

先日もこの場で少しお話ししましたが、かわさき阿波おどりについて、子どもたちの前で「これは何のためにあるの？」という話をしました。すると、子どもたちは「…（点々）」という感じです。

でも、その「……」こそが、これからの探究なんだろうなと思っています。「なぜかわさき阿波おどりをやっているのか」「これをやることで地域の人たちにどんな影響があるのか」。少し難しい話にはなりますが、その辺りがとても大事なんじゃないかなと感じました。

また、4年生・5年生・6年生についても、今まで総合的な学習をやってきましたが、4年生だと福祉や環境、5年生は自然教室があるので環境に関するテーマになりがちで、6年生は歴史や修学旅行、卒業と絡めたキャリア的なテーマになりがちです。そうしたイベント的なものとこれからの学びをどうつなげていくか、そしてそれが地域とどう関わるのかという点で悩んでいました。

委員の皆さんからは、「地域をどう捉えるかが大事ですね」「川崎市にはたくさんの人材がいるので、それをうまく活用すれば学習が広がり、深まっていくのではないか」という意見をいただき、とても参考になりました。

最後に、教育長から「高校の先生もいらっしゃるので、最終的には自分の『好き』をどう探していったらいいか、それを極めていけるか、そんな子どもを育てていけるといいですね」というお言葉をいただきました。

小学校は小学校なりに、その段階に応じて考えていければいいかなと思っております。

以上です。

司会：どうもありがとうございました。

続いて、Cグループ、よろしくお願いします。

【Cグループ 切れ目のない支援】

稲葉委員：最初に卯月委員から、学びの多様化学校を見学された際の様子についてお話をいただきました。地域の一般的な学校よりも、さまざまな面で柔軟な対応をしていて、子どもの実態をよく捉え、先生と生徒がタメ口で話すことも許されるような雰囲気

だそうです。授業に出なくてもよいという形をとりながらも、学校としての在り方や「こうなるといい」という方向性を先生方がしっかり持っておられるとのことでした。

また、「協働的な学び」という点では、いろいろな支援が必要な子どもたちも含め、どんな子でも一緒に参加できることが大切で、「こういう子でないと参加できない」といった条件はないというお話もありました。

中谷委員からは、不登校や自死の問題も含め、安心できる居場所づくりの必要性についてご意見がありました。これからの時代、そうした場をさらに見直していくことが重要だということでした。

また、特別支援学級などで多数の子どもたちから取り出している子どもたちについても、その子たちと一緒に学べないというのは、多数の子どもたちにとっても学びの機会を失うことになるのではないか。社会に出ればそれが普通のことだからこそ、一緒に学ぶ機会を大事にすべきではないかというお話もありました。

最後に、このプロジェクト2については、やることやアイデアはたくさん書かれているけれども、これからますます多様な子どもたちが増える中で、その多様な子どもたちが共に学べる「インクルーシブな学校づくり」「学校教育づくり」について、もう少し書かれているとよいのではないか、という意見でまとめとなりました。

司会：ありがとうございました。

それでは、最後、Dグループ、お願いいたします。

【Dグループ 「学び」と「学び合い社会」の実現】

渡辺委員：Dグループです。稲田中学校の渡辺です。よろしくお願いします。

こちらのグループは、生涯学習というところをテーマに話を進めさせていただきました。

まず初めに、宮越委員から、学び合い、ここについて御意見をいただきました。この学び合いという言葉が、とても大切であるということ。

この学び合うということは、どういうことかということ、生涯を通じて学んでいく。その基礎をつくっていくために、今がある寺子屋、それから市民館、野外活動等、その他、遊びの中にも学び合いというのがあるということの意見をいただき、ただ、反面今の子どもたちの小学校5年生の例を挙げていただいて、寺子屋で子どもたちにこのような勉強が大事だよという話をすると、子どもたちは、「いや、大丈夫、大丈夫、AIがやるから」ということで終わってしまうという、その怖さはどうしようかということで話を進めていきました。

そこで、岡田委員から、3つの観点でアドバイスをいただきまして、まず一つ目が、学ぶということに関してはまず「マネジメント」がとても大事だということ。それから、「ウェルビーイング」、この言葉をもって学びを獲得し、そして「協調」、この言葉でウェルビーイングをつかんでいく。そして最後は、「利他性」というところこの3つの観点が大事であるとお言葉をいただきました。

もう一度、私の中でこの3点を、もう一度時間があったら、岡田委員にもう一回聞き直したいなと思っています。また、岡田委員から、とても面白い話がありまして、今、PC端末環境、この環境が30年後はまた変わっていくので、そういうことを意識しながら、子どもたちの学び、生涯学習に生かしていかなければならないということや、紙媒体ではなく、例えば、図書室の漫画に関することであれば、このPC環境の中で漫画も入っていて、子どもたちが読んでいくというような環境もあるんじゃないかとお話いただきました。

以上です。

(次期かわさき教育プランのキーププロジェクトについて全体協議①)

岡田委員：ありがとうございます。岡田でございます。よろしくお願いいたします。

まず初めに、このプランづくりというか、表現の仕方も含めて、素晴らしいですね。すごくいいなと私は思っています。

川崎の子どもたちに責任を取っていくんだ、川崎の市民に責任を取っていくんだ、保護者に責任を取っていくんだというのがちゃんとあるから、こういう新しい表現をしていくというふうになっている。そして、それを先生方に理解していただいて、保護者の方に理解していただいていくんだということが表れているので、すごくいいなというふうに思っております。

そこでさらにさらにこのあんこを甘くするために、少し塩を入れたほうがいいなと思ったので、少し塩の部分を言いますけれども、クラスで現場の先生方の校長先生方の、管理職の先生方の、教職員の方々の生き活きとした活動が見えるかどうか。このプランを見た現場の先生方が、「ああ、こう活動していけばいいな」、「こうしていけばいいな、この旗印の下で川崎の子どもたちに責任を取っていくぞ」というふうになるかどうかというのを、さらに話をしていくと良いのかなというふうに思いました。

もう一度言いますよ。素晴らしい素案なんです。そのあんこをさらに甘くするために、あえて塩辛いところをちょっと言ってみたということですから、悪いと言っていないので、あまり勘違いなさないでください。

それから、先ほどありましたように、ウェルビーイングといったところでは、利他性という言葉が入っていて、これもキーワードの一つになるのではないかというふうに思うんです。

AGIからASIに変わっていくのが、10年後だというふうに言われていましたがさらに、10年後には、がらっと変わっている可能性があって、私たちのこれも、過渡期のものでしかないという意識を持っていないとならないと思っています。

こんなことを言いながら、私も中教審部会の資料を紙で印刷して持ってきているんです。なぜかというと、私は、こっちに慣れちゃっているので、資料を見返して、元に戻っていくのにすごく時間かかってしまうので、付箋を貼っておいたほうが、すぐに開けちゃうこういう人もいます。

何が言いたいかというと、Z世代の若い先生方が、バブル期の55歳以上の先生方と一緒に仕事するわけです。55歳以上の方々は現場の中学生がZ世代で、小学生はアルファ世代ですから、また、異なった子どもたちを対象に、この案を作っているのもその意識がないと多分うまく伝わらないし、子どもたちのほうがうまく見えてこないんじゃないかなと思います。

10年後の子どもたち、20年後の子どもたちに、どう責任を私たちが取っていくか。東京都の子どもたちに責任は取りようがないので、川崎の子どもたちにどう責任を取っていくのかという視点で、さらに深めていかれたらいいなというふうには思いました。

塩だと思って聞いてくだされ場と思います。ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。大変おいしい塩、ありがとうございました。

他の委員の方ありますか。

米林委員：市民委員で参加させていただいている米林と申します。

先ほどお話の中で、AIの話がありましたが、私は会社員で管理職を務めているので、ここに出ている課題感は、ほぼ民間企業と同じ課題だと思っています。もちろん働き方改革もそうですし、多様な世代、生涯学習や学び合い、シニアになった方々にこれから長く活躍してもらわなければいけないという問題、そういった課題が教育の世界という枠でも現れていると思われますので、民間も含めて社会の課題と受け止めています。

A I に関しては、本当に劇的な速さで変わっていくので、おそらく5年後には、また想定もつかないような状況になっていることを前提に考えると、すごく難しいことに皆さん取り組んでいらっしゃると思います、参加させていただいてすごく学びがあります。

課題について、自分自身も現場でできるかということを考えています。いわゆる「トップから言われて…」ということがたくさんある中で、現場で処理し切れないことが多いです。私も、理念としては総論は変わっていないですが、各論に落としていくと現場で不具合が出てくるので、そこをできるだけ道筋をつくるまで議論して、現場の先生方を助けることができればと思っています。

二つあって、特にA I の時代になると、子どもが「A I が教えてくれる」と言うときに話すことは、「あなたはいずれA I に使われるだけの人間になってしまうよ」と。会社で取り組むA I の難しさは、正解かどうか分からない、正解が分かる専門家が必要ということがあるので、A I を使えるか、A I に使われるかというところが、子どもたちの教育上はすごく大事なのではと思っています。それは学び合いのところで、子どもたちのほうが、むしろA I を知っていたりもするので、地域や大人の方が逆に教えられるようなこともあると思っています。

もう一つは、教職員の方々の働き方改革が、自分が会社員としてもすごく切実と思っているので、描いている絵は素晴らしいですが、実現するためにまず、教職員の方々の何の負担を下げるかということを実体的にして、それをもとに議論していただくことが大事と改めて思いました。

(次期かわさき教育プランの施策・事務事業について 全体協議)

進行：浦山委員、よろしくお願いいたします。

浦山委員：政策の5のところで、地域と学校の連携・協働というのも、学校だけでは難しいということがずっと言われてきていると思います。具体的に学校の何に対してどうすればいいかという関わり方について、地域や保護者側からの関わり方というのは、具体的に取り組みを展開していかないと難しいなというのを感じているので、自分の近くの学校の先生方とも相談しながら、取り組んでいければ良いなと思っています。よろしくお願いします。

進行：ありがとうございます。宮越委員、どうぞ。

宮越委員：地域教育会議から出ている、宮越です。

浦山委員の発言にも関連しますが、地域教育会議という組織は、30年ほどの歴史があり、当初は全国的に大荒れだった、校内暴力などで教育の危機と言われて、地域の教育力に対する大きな期待を持って出発しました。当時は、地域と学校が連携しながら、劇的に落ち着いた教育環境ができるというようなことでありました。

そういった経緯で、地域教育会議という組織が川崎市の一つの特徴として誕生してきたわけですが、最近はいじめの関係、不登校の増加とか、自死の増加とかというようなこと、新しい課題の中で学校と地域が連携しながら、いろんな活動をしています。特に最近はコミュニティ・スクールが今年度で全小中学校に設置されるにあたって、設置の趣旨に沿うような形で、地域教育コーディネーターというものを選出していて、51中学校区の中の44中学校区、133名が選出されました。これは行政や学校で、お願いされるからやるというよりは、市民自らが教育に参画をしていくという、市民の自発性をベースにした会で、川崎市の特徴的な組織として、ほかの地域でもあまりないところで頑張ってきましたが、なかなか苦しいです。でも、しっかり支えていかないと、教育への市民参加、地域の教育力というのはそういうところに活かし切れないと思っています。寺子屋が、具体的に事務事業の中に記載されていて、私も寺子屋を担当していますので、寺子屋の名前を宣伝していただくのは、とても嬉しいですが、やはり同じように、歴史のある川崎市の、市民参画も特徴である地域教育会議への期待感をもっともっと欲しいです。学校から地域教育会議に期待するよ、教育委員会に期待するよという、具体的なリクエストが欲しいです。

その部分をみんなでこれまでの頑張りに応えて、これからの川崎の目玉として、ぜひ応援してもらいたいのので、その言葉を事務事業の中にしっかりうたっていただきたいです。

進行：かなり具体的な御意見ありがとうございます。

高橋委員、お願いします。

高橋委員：東京学芸大学の高橋でございます。すばらしいこの計画、ありがとうございます。

私は川崎市民ではないですが、少し羨ましいなと思ったのは、特に細かいこれらのプロジェクトをKey Projectで再構成するという部分が非常にユニークだなというふうに思いました。

これはやはり、先日、OECDで非常に世界中の行政システムが部分最適に陥っていて、部分的にはすばらしいんだけど、全体で見たときに、みんながハッピーなのかというような指摘があり、全体性もしっかり見ていく、全体最適を見た上での部分最適だというふうに考えていくと、こういうKey Projectみたいに、全体が見られるようにしていくというのは非常に重要だというふうに思います。個別の成果指標ももちろん重要だし、行政だとそれぞれに担当者がいるので一つ一つ見取って、称賛してあげるという意味では重要だと思うんですが、それをつないで、全体な幸せをどう川崎で実現していくかというふうに考えていく意味でも、非常に工夫に満ちたやり方かなと思っています。

これはいろいろ考え方があると思いますが、私自身はKey Projectみたいなものを、さらにベースになるような、四つをつなぐようなものの考え方はないだろうかというふうに考えるタイプで、身も蓋もないですけど、つなぐものは基本的には、コミュニケーションだと思っています。人、生き物は、次の世代にもっと幸せになってほしくて、知のバトンをつないでいくというふうに考えると、それはコミュニケーションで次の世代に伝えていくんだというふうに考えれば、探求で地域を追求していくというのも、川崎のよさを知って、次の世代に川崎を伝えていくことだろうし、働き方というのも、情報が円滑に流通して円滑に共有されていけば、大分片づくような話だと思うので、コミュニケーションや情報の流れというのをいかに円滑に整理できるかということが重要でだと思います。AIもその範囲の中で、情報の流れを人間が処理できないような情報量になってきたものをAI要約してくれるような存在なのではないかと考えると、大体すべて情報やコミュニケーションみたいなもので整理できるんじゃないかなと思っています。

いずれにしても、その部分最適も、非常に行政の仕組みとしては重要だと思うものの、全体最適の「みんなと共有したい価値観」をしっかりと捉えていくということが重要じゃないのかなというふうに感じたところです。

以上です。

進行：ありがとうございます。

ほか、ぜひ御発言、まだいただけていない方も含めて、いかがでしょうか。

中谷委員、お願いします。

中谷委員：保護者の意見ということで、中学生と小学校5年生の子どもがいるんですけども、先日、子どもが授業をやるということで、ベンチャーカフェ東京という場所で、いろいろな企業の方と生成AIの情報研究学会で、みんな一つになって、こんな感じで2、3時間議論し合うという場があって今AIがどういうふうに使われているか、これからどうなるみたいな話をしました。中学生が、何に使っているのといえ、お察しのとおり、「レポートを作った」「100点をもらいました」とか、むしろ依存していて、これから僕はどうなるんだろうとか、そういう、もちろん教育となったときには、先生、生徒という関係で、変わらないと思います。ただAIというそのテーマになって、話をしようとなったときに、自分の子どもが、その先陣を走っている研究者の方とも対等に、そういう話にもとついていけているということを鑑みたときに、ここから先の10年は、岡田先生とかがおっしゃっていたように、どうなるかというのが全く見えない中で、見通すのは難しいので、もしかしたら私たちは、子どもたちに教わることもあるかもしれないという、そういう視点、姿勢、覚悟、器を持つということも大事なのかなと思います。

あと気になっているのが、教育DX推進事業ということで、GIGA 端末が1回転してだんだん古くなってきていてどうなるのかなという不安をよく保護者の方から聞かれるので、準備はされているとは思いますが、やっぱり新しくいいものに触れることで子どもたちはわくわくするので、ちゃんと新しくなりますとか道筋を示していただけるといいなと思います。

自分はPTA会長もやっていて会長会などでもよく体育館の空調に関して話題になるのを聞いていて、生死に関わる場所もあるので、ぜひ、大丈夫ですよということを示していただけるといいなというふうに思いました。

よろしくお願いします。

進行：ありがとうございます。今、御指摘の部分につきましても、きちんと我々も同じ課題認識を持って、具体的な取組に関しても、きちんと記載できるように準備のほうは進めており恐らく来月には、具体的な取組を含めたものをお示しできるタイミングが来るかなと思っていますので、よろしくお願いできればと思います。

米林委員お願いします。

米林委員：2点だけ感じたことを申し上げます。

ちょうど高橋委員がおっしゃったことと少々近いところがあるのですが、業務を事業に落としていき、だんだん細分化していくと、同じことを目指しているのにやっていることが違う、同じ山の山頂を目指しているときに、どっちの道から登っているようなことが結構ありがちです。例えば、1個目の探究的な学びというところと、先ほど御議論いただいた地域とともにある学校づくりなどは結局、目指すところは似ていたりするところがあると思います。ここを細分化した後に、やはりこういった場や、立場のある全体を俯瞰できる方が、どことどこを近づけたり、どことどこコミュニケーションをとって連携させるかどうか、そういった働きかけが必要と思いました。同じことをいろんな部署で考えているようなことが起きがちだと思うので、そこは分けた後も、再編というわけではないですが、うまく連携を取るということが、成果を生むことにもつながるので、そういった視点を持っていただけるといいなと思います。

もう一つが、主なアウトプットということで、難しいけど、できるだけ数値化を目指してほしいと思っています。数値にできないものは、せめてあるべき状態というか、主なアウトプットがふわっとすると、ふわっとしたままで、よかったのかよくなかったのか、成果が出たのか出なかったのか、よく分からないものになってしまうと、次に進まないと思います。そこを誰が判断しても、ここはできたけどできなかったとか、そうい

うことが明確なるように最終的にこの政策立案シートのところで書いていただくとよいと思います。

以上です。

進行：ありがとうございます。お二つ指摘いただいた、一つ目のほうは、実は我々も十分認識しておりまして、Key Projectは、4つがそれぞれ分かれているようで、関わり合いがあるというところで、資料3の1番最後のページを少し示している図が一番分かりやすいんですけども、特にKey Project 1の探求と、Key Project 4の社会教育、地域との取組というあたりは、当然関連をしていると思っております。探究的な学びを充実させることで、学び続ける人材ができ、それが地域に戻って、学びと学び合いの社会を実現することで、ロールモデルとして、今度は学校にはまた入っていくような、そんなつながりを考えていたり、当然、探求とKey Project 3の働き方の部分に関しても、同様の部分がありまして、働き方改革を進めることで、人が集まってきて、それが児童・生徒の資質能力の向上にも当然つながることなどを少し意識をしながらつくらせていただいている部分もございます。

ただ、なかなか1つ1つの説明をさせていただくと、このつながりが見えづらくなりますので、その辺りはしっかりお示しできるように、プランの中でも工夫をしているところでございます。

2点目のほうの数値目標の部分につきましても、これは総合計画、市の全体計画とのちょっと整合を図りながら作っている部分もございますので、お示しできる部分と、なかなかそこができない。ただ、先ほど委員もおっしゃっていただいたように、定性的でもいいから、目指すところを示したほうがよいと言ったあたりは、そのとおりでございますので、これも今後具体的な取組の内容がお示しできる段階になりましたら、そういった記載も含めて御確認いただければありがたいかなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございます。

進行：最後に卯月委員、いかがですか。

卯月委員：国立教育政策研究所の卯月でございます。

興味深いことがたくさん書かれているKey Projectの資料と、あと施策・事務事業の資料を読んでいたのですが、よいことがたくさん書かれている一方で、場合によっては、読み手がちょっと咀嚼し切れずに、あれもこれもという感じになって、今後優先順位をつけたりするのが難しくなる可能性があるのかなとも思いました。

それでも施策・事務事業については、項目として書かなければならないことがたくさんあるのはやむを得ないかなとも思いますので、Key Projectのほうの表現で、あんなこともこんなこともというように見えるような書き方というよりは、それぞ

れのKey Projectについて押さえておくべき、共有すべき考え方や方針が、よりシンプルに、だけど大事なことは落とさずに伝わるような言葉でまとめていくといいのかなというふうに思いました。

以上です。

進行：ありがとうございます。そうですね、その辺りは少し意識をしてもう一度見直してみたいと思います。ありがとうございます。

岡田委員：先ほど、高橋委員がおっしゃったようなコミュニケーションというのは本当にキーワードだというふうに思って、川崎の市民と先生方と子どもたちとのコミュニケーションの在り方が、すばらしい、密着型というか、非常に近いというこのよさをぜひ生かしていったほしいなというふうに思うと同時に、「環境は人をつくる」ということを念頭に、このプランを生かすために、今の学校の環境はこのままで本当にいいのか、今の校舎を使いながら、何かできないかな、つまり、そういう環境を変えていくことで、これがもっと現実的なものになるのではないかなという思いがあります。

あと2つあって、1つは、eポートフォリオをしっかり構築して、その積み重ねがちゃんと履歴として残っていくというのが欲しいなということとです。

最後ですが、探求に集中できる時間というのは、探求の学びの充実のところで出されているのは、1年以内の計画になっているので、本当に1年以内の計画だけでこれができるのか、発達段階を考えたら1年でやるしかないというところもあるのですが、2年、3年かかっていく方法はないのかなと思います。

例えば、スーパーサイエンスハイスクールの子たちがやっているような探求は、1年間で完結しないはずなんです。3年間かかって行って、その中で、2年のときに学会発表がなされるとかも、そういうのがあるのははずなんですよ。そうすると、そういうものを意識していったほうが、新しいこのプランがもっと生きてくるんじゃないかなというふうに思いました。

以上です。

【以上】